Forex

株式会社　ジャパン
エコノミックパルス

〒107-0052
東京都港区赤坂1-14-5
Tel 03-3568-2973
Fax 03-3568-2977
www.j-pulse.co.jp
info@j-pulse.info

Market Insight

2020年6月29日（月）

円買い圧力と円戻り売り綱引き

感染2波、各国指標、米連休前調整など焦点

今週の為替相場はリスク回避による根強い円買い圧力と、安全逃避のドル買いや過度なリスク回避の緩和などによる円戻り売り・外貨押し目買いの綱引きが想定される。週間予想はドル/円が106.20－108.30円、ユーロ/円は119.30－121.60円。前週は米国での感染2波警戒などで、リスク回避の円高が優勢となる場面があった。一方で安全逃避がドルを下支えしたほか、米中対立懸念の緩和などで過度な円高も抑制されている。今週は感染2波や各国指標、米国の週末連休前の調整などが焦点になる。

ドル/円の日足テクニカル、13日前後に転換点

今週の為替相場で注目されるのは、米国などでの新型コロナ感染「第2波」の行方だ。前週末からは感染再増加に加えて一部州での経済規制再開もあり、米国の景気再悪化や米株の一段安などが警戒される。今週以降も米国での感染増加や経済規制などのニュースは、米株安とクロス円での円高・外貨安の要因となる。ただし、その場合は安全逃避が全般的なドル高へと作用。ドル/円はドルの下げ渋りや下限切り上がりが支援されやすい。

反対に感染者の減少や新たな景気対策といった好材料が出てくると、米国の株高とクロス円での円安・外貨高という市場反応を生む。安全逃避後退が全般ドル安の材料となるが、米国債金利は上昇（債券価格は下落）要因になることや、クロス円での円安により、ドル/円でのドル安・円高は抑制される可能性がある。

ドル/円の日足テクニカルでは、一目均衡表チャートで7月13日前後にかけて転換点を示す「雲のネジレ」が観測されている。6月29日時点で雲ネジレは107.92－108.19円前後に位置しているが、上下動を経ながらも雲ネジレの上抜け方向を目指す機運が高まると、ドルの上値余地が拡大していく。まずは基準線107.96円前後や、7月2－9日かけて雲上限が位置する108.85円方向が当座の上値ターゲットとして視界に入る。

反対に雲ネジレの下抜けトライが強まると、改めてドルの下値リスクが意識される。下値メドとしては前週ドル安値の106.07円前後のほか、直近ドル安値である5月7日の105.99円前後や3月17日の105.69円前後の方向を試しに行く可能性も無視できない。

先行き不透明感は強いものの、現状段階で過度な円高を制御するのが日銀による資金供給の増強だ。日銀は新型コロナ対応金融支援特別オペなどにより、企業の資金繰り支援を強化しているが、6月16日の政策会合では従来のオペと合わせた枠の合計を55兆円から90兆円へと拡大させた。6月後半からは4－6月や1－6月の期末支援などもあり、日銀の資金供給を示す当座預金残高が急増している。

26日の速報ベースでは、前日比＋3.7兆円増の447.4兆円と過去最高を更新してきた。直近最低である5月11日（34営業日前比）の402.2兆円からは、＋45.1兆円、＋11.2%の急増となっている。当座預金は日銀マネタリーベースの主要構成項目であり、実質的な量的緩和の拡大を示す。日本株の下支えや円高の抑制、リスク回避が緩和されると株高・円安の支援材料となる可能性は無視できない。

WARNING! 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパンエコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送は法的に罰せられますのでご注意ください。

〒107-0052 東京都港区赤坂1-14-5 エグゼクティブタワー
TEL(03)3568-2973　FAX(03)3568-2977
E-Mail info@j-pulse.co.jp　URL http://www.j-pulse.co.jp
発行責任者：上坂　郁　編集長：原田　祥二

ちなみに日銀・当座預金残高の「34営業日前比＋11.2%」とは、2016年4月20日の＋11.6%以来という大幅な伸び率だ。当時のドル/円は5月の日本の大型連休要因などにより、単発的なドル安・円高加速もあったが、4月20日のドル安値108.76円前後から、5月31日には高値が111.47円方向へと短期的にドルが底上げされている。

その前では2015年5月8日の＋12.5%以来という伸び率になっている。当時のドル/円は同日のドル安値119.57円前後から、ドル高モメンタムが点火。6月5日には125.87円方向までドル高・円安が進展した実績を有している。その他の注目ポイントは以下の通り。

＜各国の経済指標＞

今週の米国市場では重要な経済指標が相次ぐ。7月1日のISM製造業景況指数や2日の雇用統計に関しては、政策支援や経済活動再開などを受けたリバウンド改善が注目される。ただし、米国では6月後半から感染2波への警戒感が高まってきた。6月30日の最新・消費者信頼感指数などを含めて、今後の米国指標は再減速のリスクも注視される。

今週は中国でも最新6月分のPMI関連指標が相次ぐ。中国では先行して感染減と生産活動の再開が見られており、景気対策効果もあって反動改善の持続が期待されやすい。中国では前週末28日に5月の工業企業利益が公表されたが、前年比＋6.0%と前月の－4.3%から急回復し、半年ぶりの伸び率を記録していた。

＜米国の週末連休と連休前調整＞

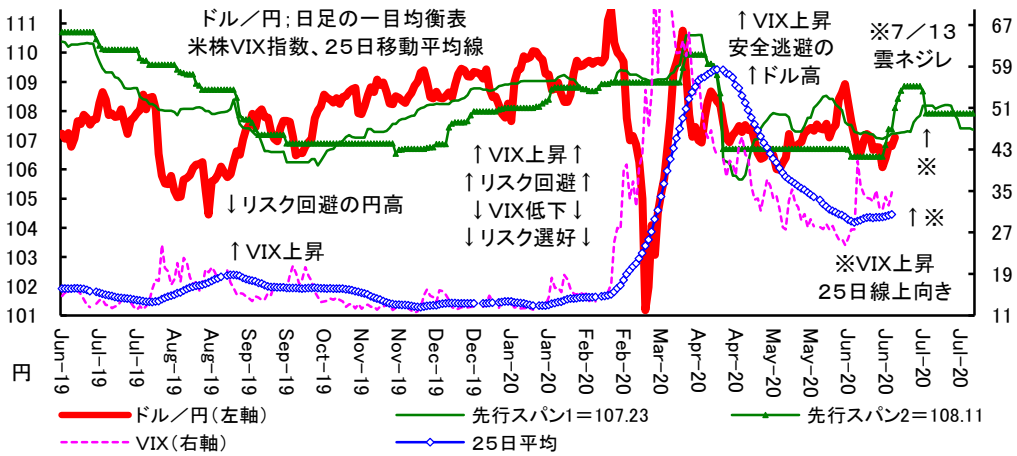
米国市場は今週末、7月3日から独立記念日（4日）の連休入りとなる。連休入りの前にかけては、ポジション調整が波乱要因として注目されそうだ。とくに米国株は前週以降、高値警戒感に感染2波懸念が重なる形で調整急落へと転じている。3日からの連休を前に利益確定売りやポジション手仕舞い売りが進むと、米国の株安とリスク回避の円高、あるいは安全逃避による対円以外でのドル高（ドル/円はドル下げ渋り）という展開が想定される。

＜クロス円の週足テクニカル＞

為替相場の短中期トレンド判断で参考になるのが週足テクニカルだ。クロス円は総じて3月後半からの「外貨売られ過ぎ修正」的な外貨反発を経て、週足・一目均衡表チャートの雲下限や雲上限まで到達したところで外貨高・円安が一服となっている（戻り高値一服）。先行き雲の上下限は8月から右肩下がりに切り下がっており、当座は雲上下限などを上値メドとした戻り売り圧力の強まりや、日柄調整によるレンジ横這い化が意識されやすい。

29日のアジア市場時点で雲上下限の位置は、豪ドル/円が74.10－75.34円前後、NZドル/円が70.59－71.56円前後、ユーロ/円が120.06－121.61円前後などとなっている。

一方、トルコ・リラ/円の週足テクニカルでは、一目均衡表の転換線15.45円前



後、9週移動平均線15.65前後などの上抜け定着攻防となってきた。先行き上下動を経ながらも上抜け維持できると、年初からの下落トレンドの一服が後押しされていく。9週線の方向角度は微妙に上向き化へと転換しつつあり、転換線や9週線などを下値メドとした下限の切り上がりや下値固めが焦点になる。

＜スイス・フラン/円の月足テクニカル＞

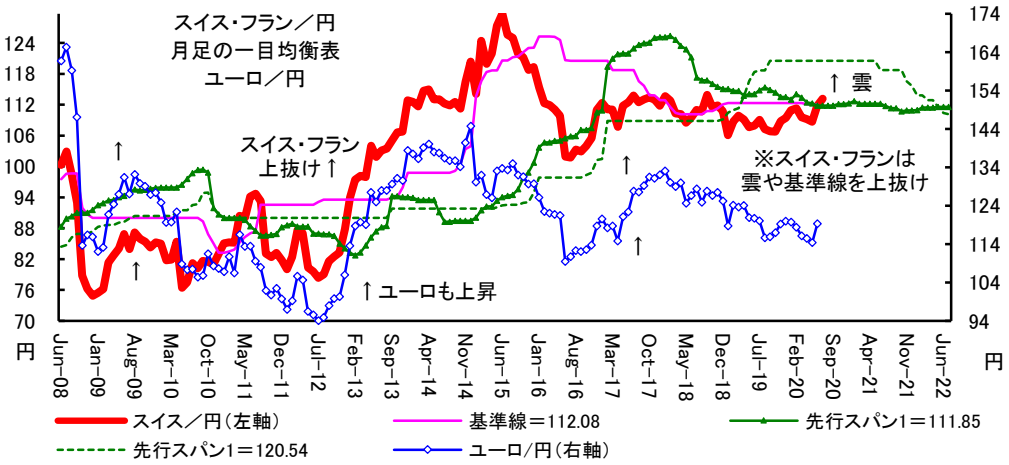
為替相場の中長期トレンド判断で参考になるのが月足テクニカルだ。スイス・フラン/円の月足・一目均衡表チャートでは、29日のアジア市場時点で基準線112.08円前後、雲の下限111.85円前後を上抜けする流れとなってきた。これから上下動を経ながらも上抜け定着できると、下落リスクが後退。基準線や雲下限などを下値メドとした下限の切り上がりや下値固めが支援されやすい。

現在のスイス・フランは、安全逃避や追加緩和手段の狭まり、経常収支の改善などで底堅さを示している。一方で対円相場では、同じ欧州通貨であるユーロとの相関実績も見られてきた。前回、スイス・フラン/円が月足・基準線の下抜け状態から上抜け突破し始めたのは、2017年9月以降であった。当時のユーロ/円は同月のユーロ安値129.23円前後から、翌2018年2月には137.51円方向へとユーロが切り上がっている。今回のスイス・フランの底堅さについても、ユーロの対円「底上げ」支援材料として注視されよう。

＜日本株の配当払い込み、リスク回避抑制や外貨転にも＞

日本株は感染2波などが懸念されているが、7月上旬にかけては株式配当の払い込みを受けた再投資が株安歯止め要因として注視される。

コロナ影響で不透明感はあるものの、3月決算企業による配当払い込みが7月上旬にかけて予定され、内外投資家による配当資金の再投資が見込まれる。日本株の下支え効果を通じて、リスク選好の円安や円高歯止め要因となる可能性は無視できない。同時に配当を受け取った外国人投資家に関しては、配当利益の部分的な本国送金を通じたドル転やユーロ転（円安要因）などが注目される。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。